


107 明治12年11月9日 菊池長閑宛

第十三号 明十二
十一月九日 (長閑注記)

去る三日にハ初雪降たり一体耶蘇の誕生日(十二月廿五日)頃に降事なるか今年ハ存外の早雪なり十月卅一日ハ盆の十五日と

も云ふへき日にて切仕丹旧派の荒ゆる上人尊人祭日の前日なれ
ハ其夜にハ地獄の釜か開と見え幽霊共の出ると云ふ語り伝あり
幽霊杯の出て来位なれハ不思議の事あるハ不思議ならず其不思
議に付てハ爰に昔より残来りたる一つの可笑敷風俗あり夫ハ若
い者共の縁不縁か分ると云ふ事なり之を験すにハ色々の仕方
ある中に一つハ夜の十二時に鏡の前に独り立椅子(いす)を食居れハ後
日夫たるへき人の面影ハ鏡に写るなり又ハ同じ夜半に鏡を片手
に持ち片手に蠟燭を携て後ろ向に室(当)地にてハ家毎に物置室
ハ椽下(いす)にあり穴蔵なり)の梯子を下ると矢張後日の夫か鏡面に
現れるなり此等ハ総て女子共のする業なり真逆少し物識たる娘
共ハ右を信仰もす間敷けれ共女ハ何国にても惑の多き故戯れ半
分若しヤに引され試るなり然し今ハ一夜の遊び事となり友達を
呼集て数々の不思議を験(す)して楽む者多あり私も招れて或家
に参りたるに若い者共男女打合して十人計り来り居晩飯饗応の
後主娘(当)国并に欧州の風男か女を招待せずして女か男を招く
を相当とす(抹消)但し婚礼したる後ハ男か女を招ても不当ならず
去共角立たる折にハ夫婦の名か又ハ妻のみの名にて招ハ礼な
り) 諸客を料理場(流し前)に連行各に粟二つ宛を配当す扱一
つの粟を自分と定め今一つをハ好たる女と定め二つ共籠の上に
乗セ置に若し一つか又ハ二つ共飛除か割れると跳たり割たりし
た方ハ不縁両方共なら兩人に縁かないと云ふ縁強き者ハ焼焦る
迄動すに居る次にハ鉄の杓子に鉛を踏し片手に夫を持片手に小
き鍵を(当)国にて用ゆる鍵の形ハ総て  の如し) 持右鍵
の穴より鉛を水一杯の金手洗に滴すと落るに随ひ堅くなる故鉛

ハ色々の形をなす其形ハ思を掛る男か女の頭字を示す事なり日
本に譬て云ハ、鉛かイ様なる形になる時ハ伊東とか池田とか判
するを云ふ次に水を入たる皿墨を入たる皿空皿と三を机の上に
並へ誰か一人(抹消)の眼を手拭にて暗まし孰か一つの皿に指を入
させる若し其人水皿に指を入れるハ未タ娘礼した事のない男
(又ハ女)と夫婦になり墨皿を撰む時ハ妻を失たる男(又は後
家)に連添い空皿に指入る、ハ一生独り女(又ハ男)にて暮す
前兆なり次に水の入たる大皿に針を入る若し針か沈めハ其人不
縁なり又針と針と相寄と其人達の中(中)よき事を徴す終に大な水溜
に椅子(いす)を落す男か落す時ハ椅子を好きな女と定め椅子浮へハ針の
不思議同然吉縁の兆にて夫より歯にて右菓物を取揚るハ本式な
れ共着物か濡れる故食事(中)に用る熊手を落すか投付るに変式した
り若熊手が椅子に刺り熊手に付て揚れハ掛想し居女と夫婦たる
の吉兆なり右の五式ハ夥なる仕方中の一二にて此外不思議を験
す方幾位もあると云ふ此等ハ皆日本の縁結(縁)ひ杯(杯)に似寄たるもの
と思ふ互に其人の慕居様なる男女を名指し吉兆ある時ハ咻(い)し立
楽むなり此も先便申上たる開けぬ昔より伝残りの馬鹿けたれ共
障りなき風俗の一と云ふへし右ハ野蕃の風俗なれハ禁止する杯
と当州の知事か云出したら夫こそ人民の自由を妨るとか手出し
過るとか世間一般より責立られ物識たる人よりハ後ろ指をさゝ
れる事目前の事なり何故と云ふに可笑敷ハ可笑けれ共打棄て置
た迎人の徳行に害あるてもなし良や禁した迎別段人の行善なる
てもなく又智慧増るてもなし此風俗の存在するハ人民か未タ此
様な事をして楽みとする明証なり人民か此様な楽を欲する時

に幾位沙汰にて禁した逆指止たる事丈ハ行ぬかも知ね共夫に似寄たるものを考出して楽むへく決して禁せられたれハ逆其日より此様な遊をするよりハ寧ろ論語孟子（支那日本にて云ハ、）を讀うと云ふ心持にハ成らぬなり楽みと思たものを打棄るにハ腹を洗直さねはならず腹を洗直すにハ智慧の増ねは往（抹消）す扱夫ハ如何して宜ろふと云ふ日にハ（抹消）育るに外なし教へ育るハ父母（抹消）師匠坊主の仕事にて政府の役目外なり沙汰書ハ智慧の板にハなきものならん人民か一度此様な事ハ馬鹿らしいと考付て投棄たる日にハ千枚の奉書紙を積て其事をしろと沙汰した逆指図の行はれぬハ知た事左れハ政府の沙汰にて人の心中を善くも悪くもされぬ事明かなり右の一風俗ハ固（マコ）より瑣細の事柄なれ共之を推は弘まるへく爰の処ハ政事を執る人達の心得へキ要めなるか如し此逆折々ハ当国の風俗等申上たれ共便毎に是そと思ふものを考付す当地滞留の月数も最早少けれハ何か聞れ度ケ条あらハ仰越れたし知ぬものハ聞調てなりと申上へし

父君

武夫

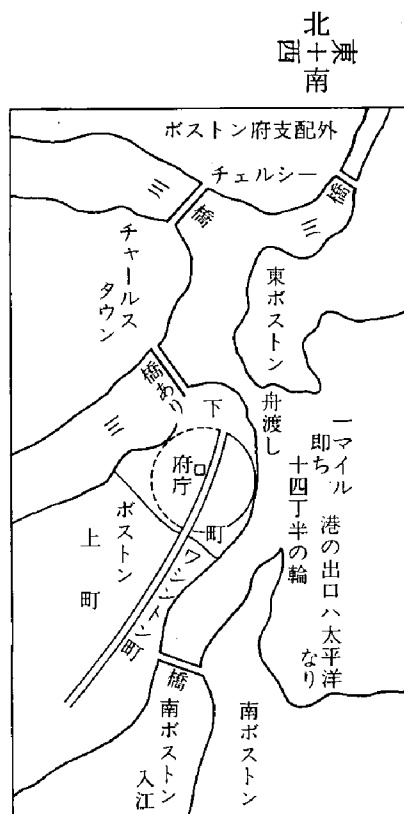
（長閑注記）

「十三年一月十日日数六十四ケ日ニテ達ス

一月十三日此方第一号ヲ以返事出シ」

（別紙）

ポストン府商売見世の様子附たり下町の略景
 当府も外の府と同しく上町下町と分れ上町ハ住屋敷のある所にて見世のなきにあらね共下町ハ商売場にて住家とてハなし一体ポストン府と云ハ余程大きな所と思はるゝならんれ共府下と唱ふへき分ハ二里四方ハ逆もなし長き所にて三里少し余広き所ハ一里半位なり




右の略図にて見らるゝ通りポストンのみハ僅か一里半位の長さにて幅ハ漸々十五丁もあるへし府の支配所ハ中々広き事なれと繁華の場ハ先図にある丈なり東南ポストンを東京に譬る時ハ深川本庄盛岡にて云ハ、明治橋向仙北町夕顔瀬向の類なり但し東ポストンは小島にてポストン南ポストンチャールスタウンは何れも陸続きの出島なりポストン府支配下の人口即今ハ三十万或ハ三十五万もあるへし下町ハ大概十五丁四方もあるへく其中海岸に近き分ハ尽く問屋に

て丁度東京の小舟町辺の如し蒸気船蒸気車の乗出場
ハ勿論製造所等も皆町外れに陣取夫に續て百穀、織
物、羊毛、皮革、綿、鉄、炭薪、酒、油、乾魚、等
の間屋石、財木、問屋煉瓦石問屋孰れも此辺にあり
又少し海岸を離れると魚鳥、諸肉、青物、の市場あ
りて皆一丁四方計の大建屋の中を仕切り幾人となぐ
見世を開き商ふ爰にてハ重に卸売をするか小売ハな
し外の見世よりハ直段安き故遠方より態々買に来る
もの多し但し朝市なり」夫より諸〔銀行〕為替座諸請
合会社商法相談所仲買仲売所荷物運送問屋細物問屋
代言社郵便所等のある所になり町会所即府庁近辺に
ハ小売店軒を並へ警ハ東京の本町通りと浅草神明前
杯を交せたる様なり前に此辺にハ住家なしと申たる
を定て怪しまるゝならんか当国ヤウロツパの風に
て店ハ店住家ハ住家と別になし商人ハ皆上町に家を
持か或ハ寄宿して朝に出来り店を開き略にハ見世を
メて帰宅するなり東京の煉瓦作りも素ハ見世のミ
に用る都合にて建たるか兎角風俗ハ急に改めらぬも
のなれハ矢張元の如く店の奥に住事になりたるかと
覚ゆ店の開メの時刻ハ商売柄に依て違ひ見世の大小
に因て異なるハ早き分ハ朝六時半より七時頃に開き
大店ハ七時半より八時頃(抹消)に売初め為替座仲買
代言役所ハ九時より商法会議所杯ハ十一時に手出す
るなり但し手代丁稚類ハ早き分六時遅き分も八時に

日曜日の法

ハ出掛るなり店メの早きハ為替座にて三時にハ閉店
火災請合会社海難請合会社人命請合会社商法相談所
等之に引続き跡ハ大概晩の六時に見世を仕舞ふ尤も
乾物屋肉屋等ハ七時頃迄開き居ものあり土曜日の晩
ハ十時より十一時頃まで働く是ハ当国の風にて日曜
日に開店差止める故諸人ハ其日食ふ丈の物を此晩に
買ねはならず夫か為替座よりハ遅くまで商ひて諸
人の便利を助るなり」日曜日にてはパン屋牛乳屋ハ
朝十時頃まで見世を開薬屋ハ別段の事なれハ日曜日
も不断の通り商ひをなし何時も夜の十時より十一時
頃まで見世をメす且薬屋にハ大概目覚し鈴と云ふも
のあり急病杯の節ハ之を引唱すと番の手代ハ起来り
薬種の調合をする事なり右日曜日に付ての法ハ元至
極敵かりしものにて極要の事(警ハ医者の見舞パン
ヤ牛乳の売買)か寺参りに付ての事ならてハ許さず
遊芸ハ勿論仕事ヤ商売取引をすと罪科に陥され夫
より起りたる公事ハ総て取揚なき事なりしか近年ハ
大分緩くなり蒸気車ヤ乗合馬車ハ此法外に(抹消)て夫
にて化俄(ごご)したる人ハ会社に対して訴出るによし」又
裏町ハ勿論表町にても煙草屋酒屋杯商ひをなす者儘
あり去此日貸たる錢ヤ結たる約定ハ未だに宰判所
の手を経て取戻事ならず又破約をした者を訴事もな
らず警ハ馬車(乗合馬車ならず)を借て乗廻り若し
其日払はずに戻ると馬車屋カ此借金に付て訟出る事



見世内外の景「此ガラスは二間か三間に一間位の一枚ガラスにて日本にある様な小板ガラスならず此ガラスは当国にても未だ製造出来ず皆フランス国より舶来するものなり」

叶はず借た者か面の皮を厚くして居れハ一生不払に濟事なり奇妙なる法と云ふへし此法ハ元日曜日も不
断の通り仕事してハ自ら宗旨信仰の心か薄くなると
云ふから立たるなれ共些々今の世の中に合ぬ様なり
去氏一週間に一日仕事を休み勞れを直して翌週新た
に働き出は至極良風俗なり却説日本と当国の商ひ方
にある違ハ未だ／＼外にあれば先爰に見世の景を記
さん日本の見世は開放しにて少し街道よりハ高く一
寸腰打掛る様なれ共当地にてハ高さ二間より三間位
のガラス窓を張其内に売物を飾り立つ戸ハ大概廻し
戸にて開切にするもあり床毎めるもあり大店の入口
ハ扉にて押開るもあり引開るもあり皆針金仕掛にて
独り手にめる様拵てあり此の如き扉ハ二より三つ四
もある事なり上り段のある見世もあれと大体ハ道と
同じ高さにて客に上り下りの面倒なし」店內ハ板の
間か平石を數人の通行繁き所にハ蓆を布沓音のセ
ぬ様にす腰高さの厚板台  の形ちに打廻し
(尤狭き見世ハ片側にのみ据置き大店の模様も少し
違ふ) 其上にガラス張の箱を置き商ひ物の見本を初
め細か數見目よき品ハ尽く其間に打並へ客の見廻る
に任ず右ガラス張の箱共に高さハ大概乳丈位にて商
人ハ台の向に客と見合て立都合客か何か氣に合品あ
り求んと云へハ商人ハ其品を箱より取出し其上に並
へ為見錢の払取も箱の上にてなす事なり此外壁に付

看板の事

た桶やら引出やらありて物を仕舞置台に箱を乗せぬ
所あり爰にハ重に錢の取引ヤ包む事ヤ其他ガラスの
上にてなし難き事をし客の掛へき腰掛もあり左れ共
商人ハ飯を食ふ間の外一日立切り帳面付さへも胸高
さの机に向ひ立なからする事にて日本の如く煙草盆
を扣繰くり座り込み煙草を呑様な事ハせず煙草売の
外ハ煙草を吹しなから商売をするものなし大店の如
きハ幾通りとなく右の台を置並へ此台ハ何品彼台ハ
何と部分をし台毎に小手代一人を置客ハ台の間を通
り品を見分す錢勘定ハ越後屋大丸杯の如く総て帳場
にてする事にて手代と帳場の間を走り廻る小僧あり
腰掛に座ると自然怠りの起り随て客の取扱も悪くな
る事故腰掛とてハ客の座るものハ外一つもなし「但
し女手代にハ腰掛を許すものも有様なり当地の大店
と云ふへきものハ中々越後屋大丸杯の類にてハなく
二倍か三層倍もあるならん然し右の如き大店ハ当府
にも五ツか六ならてはなし手代共の給金ハ大概売物
の直段にて極る事譬へハ五拾錢の物を売者ハ幾位一
弗以上二弗の品を預りて商ふ者何程の給金を遣ると
云ふ定なり」看板にも色々日本と異なる事あり先
煙草屋の看板ハアメリカ印度人の像なり是ハ元ヨウ
ロッパにハ煙草と云ふものなかりしか凡ソ三百年前
頃(エギリス)エスパニヤ人当国に渡り土人(印度
人)の香居を見て初て煙草を知本国に持帰たるより

煙草の由来

煙草ハヨウロッパに弘まりたるにて印度人ハ煙草の元祖なる故なるへし「因に云ふエスバニア語にてハ日本と同じく「タバコ」と云ひイタリヤ語にてハ「タバコ」フランス語にてハ「タバク」エキリス語にてハ「トバッコ」と云ふも元エスバニア人かアメリカ土人の言葉（土人の語にて煙管をタバコと云ふとの説もあり「エ」人ハ初て土人の煙草を用居たるを見し土地の名とも云ふ）を取用たるより追々なまりたるなり煙草とハ嘸支那語ならんかヨウロッパより彼国に伝来したる日にハ何か「タバコ」の音に近き字を用たるならん然るに煙草と名付たるを見れハ支那にハ元よりありしか日本にハ「エスバニア」人かポルチュガル人〔^{抹消}より〕か伝たるなるへし左らねハ「タバコ」と云ふ名の出へき様なし去厩支那にありし事ならば彼国より日本に渡来すへき筈なり又日本と支那共伝来の国を異にするハ甚不思議なり殊に談婆姑杯書たるを見た欵との覚もあり支那にても煙草と而已唱すして外に名かあるかも知す本草綱目拝調たら分るかと思へる若し既に承知あらぬならハ序に調られてハ如何」又は大な巻煙草を軒先に釣し置もあり質屋の看板ハ金の三星にて其形  の如し此所謂ハ終を聞たる事なし薬屋ハ薬を粉にする道具を目印とす其形  の如し塗屋ハ色々の塗

「髮結ハ昔下科療治を兼帯セし事にて疵口を切にて巻付る様を看板となしたるなり夫ハ仕来となり今に矢張宇治巻の棒を目印とす」

社を結ぶ事

分板を標とす目鏡屋ハ大な眼鏡○髮鉢床ハ例の棒鏡売場ハ赤地の簾（是ハ只見よき為か外に訳あるか不知）茶コップキ屋ハ大な茶釜を出し置もあり此他字を書た看板ハ幾位もあれ共日本も同じ事なれハ記すに及す前に申た通り見世ハ皆ガラス窓〔^{抹消}を〕にて構ひあれハ内より窓側に出すと態々外に置す共通行人より見ゆ〔^{抹消}れ〕る故譬は鬘屋ハ鬘を冠した頸丈の形を窓側に置女の冠物屋衣裳仕立屋杯ハ飾立たる冠ヤ紙衣裳を着せた女人形を窓内に並へ置なり此類ハ看板のミならず立方見本となる様に作りものならぬ本の品物を沢山出し置事なり日本の商人ハ一人ハ一人に商売をなし決て兩人にて一つ見世を持有なし（當時風の会社ハ取除）夫故稀に大商人ハあれ共商ハ小さし当地ハ之と打て変り大な〔^{抹消}商売〕見世ハ勿論小さな見世にても二人三人と組合元手金と智恵とを集て働く故商売も自づから広大なり譬へハ出商を上手な奴もあり見世に居て売を得手なる者もあるに此二人ハ内に残て売儲は互に得かある理りなり又短氣な奴と氣長な奴と組合は互に制し合押出し合して丸く商売をする輩らもあり仕入を上手なる人と売方を得手なる者と一所になれハ互ニ一人にて出来ぬ仕事か揚り独手に商ふよりハ倍の繁昌あるへし二百弗あれハ善商売かある事を知共自分か百弗ならてハ持ぬ夫所

〔抹消〕
見世の種
類并代物
の事

て誰か相談し其人同意セハ直に百弗の出し合にて見込の商ひなすへし人間一人の智慧ハ限りあるものなれハ独り働きにてハ届かぬ事多かるを人数寄合は所謂三人寄れハ文珠の智慧にて一人の氣付ぬ所を一人か考付助け合補ひ得る故に此組合の方ハ至極良き風と思はる〔抹消〕
〔見世の種類にも色々日本と違たる事あり
随て其商ひ物にも様々同しからぬもの沢山あれハ其荒増を申上へし〕

屋号の事

日本の商人は尽く屋号を用い儘自分の姓を取て屋号となす者ありといへとも多くハ不然又商売柄を示すものにも非ず其由来ハ承りたる事なければ共昔將軍支配の日に町人百姓ハ名字を用る事成らず去共権兵衛とか三助とか俗称のミにてハ多数の商人の中間職同名ある時ハ自他の区別か付ぬ故屋号を發明したるならん屋号に国名の多きハ元大和の国より出来る権兵衛ハ大和屋権兵衛と名乗り越後より出たる権兵衛ハ越後屋権兵衛と各其生国の名を屋号としたるならん其出店や親類が増し又出店ならず共其繁昌にあやからんと其名を用しより自ら流行となり諸国皆右の如き屋号を付たるなるへし尤此他見世を開たる所に梅の樹あれば逆梅屋とか紅梅屋と屋号を付たる類も多かるへし当地にハ右の如く名字と異なる屋号を付るもの宿屋又ハ大会社の外先なしと云てよし譬へハ青物屋なら青物屋主ハ工藤なら工藤と看板に記し

請取書の事

〔別段看板を出さず彼大ガラス窓に金箔ヤペンキを以て名ヤ商売柄を塗るもの多し〕工藤と高橋と組合て出した店なら工藤高橋組と唱ふ尤も前に申た通り為替座とか請合会社とか十人も二十人も組合てする商売ハ一々其組合仲間の名を記す訳にハ参らぬ故其土地の名ヤ又ハ風雅なる名を用る事譬ハ日本兜町にあるから兜町為替座と云へ京大坂の荷廻しをするに因て京大坂荷廻し問屋又当地にて云へハ宿屋ハ海岸の涼き処にあるから海風亭と云ふ類随分見える去なから此等ハ当り前の屋号とハ余程違ふ所あり通例の屋号ハ商売柄を示すものならね共右に挙たる例ハ商ひ筋に掛る名なり又海風亭の如きハ大和屋喜八か梅林のある近辺に料理屋を開き夫を名付て梅林亭と云ふの類なり請取書勘定書等にハ梅林亭とのミ記すか又ハ大和屋喜八と書て梅林亭喜八とハ称ひまし但し当地にて工藤なら工藤と云ふハ屋と書ぬ迄にて日本にて工藤屋と云ふも同じ趣向なり〔抹消〕るへし只青物屋にても通らず青物屋喜八にても慥かならねハ青物屋工藤喜八と唱ふるなり

御金持引

当地にてハ月日夫より年を辨事なり
ホスアハ 月 日 明治 年

端(当地にてハ君と云ふ字を姓名の前に書事なり)

工藤高八ヨリ御買上成候事

贈物屋 (又ハ何々屋)

何所何所地

(品物ヲ書所)

直段ヲ書ハロ「錢位」
日

右御扱方正に請取候也
此ハ板刻シテナキモノアリ

(自分ノ名ヲ記ス所)

右の通り摺置て売たる時ハ月日年号品物直段(自分)^(抹消)

双方の姓名を筆にて書入るなり日本の如く他人の姓名を自由に記す事を甚だ打嫌ひ其人の目前か又ハ許を受ねハ決て書ぬ方□是ハ日本の如く印形を用ぬ故請取書杯ハ請取人の手つから記したる姓名なければ、
宰判所にて証拠たらぬか為なり其他仮初めにも約束書ヤ願書ハ勿論人の為に手紙を認ても名丈ハ銘々本人に記さす事にて若し其人の許なく其姓名を認むる時ハ日本にて他人の印形を押たるも同然科に行ハれる次第なり因に云ふ或日本人ハ日本取にて何心なく去る西洋人の手跡を真似頻に其人の姓名を徒ら書し居たる処を見付て彼西洋人大に怒りたる事あり
扱是よりハ見世の種類ヤ商ひ物に付て日本と当地の違ひを荒増申上へし



見世の類并
代物の事
呉服屋

呉服屋とも称ふべきものは英語にてドライ、グー

ゾ見世と云ひ乾物店の字義なり爰にハ毛織物絹布木綿類を商ひ何れも大店にて重に女の見世なり此他女の出来合衣裳、冠り物、糸、針、手袋、手拭、鼻、布巾、足袋、肌着、襟、ボタン、紙入、書状挟、等
を売り女の買物ハ大概此店にて達す、又店に因てハ出来合男子供の衣服杯商もあり男の用品もあれ共男の此店に来る者少く出這入をするは女計りの様なり又女衣裳仕立を兼帯する所もありて二階にて仕事するなり

因に云ふ女外出する時ハ大概薄革の手袋を用ゆ角立たる折にハ肱丈位の短袖を着前腕か皆隠る位長き白革の手袋をはめるを礼とす男も矢張白革の手袋を用ゆるは礼なり日本にてハ手袋を用るハ失礼なれ共当国にてハ用るを本式とす寺院に往時ハ勿論招に應じて客に往時も男女共手袋を用ゆ

小問物屋女
店


細物屋とも云ふべき店にハ矢張手袋以下の品一色又人形其他手遊物とも商ふ是も同じく女の店なり大なる呉服屋ヤ此店にて売物にて日本になき物二つあり一つハ細き絹切にて糸巻の如き物に巻てあり其染色にハあらん限の種類ありて女ハ之を襟飾(日本の平襟と同じ趣向形ちハ素より同じからず)に用ひ水引結ひに結て髪もしとし  形の髪指にて頭に付け又  形の留針にて衣裳に付飾りとなす其幅一寸より以上色々のものあり又一つハ右の留針なり男

も左なから女ハ衣裳を着に帯紐と云ふものを用ねはボタンを遣はれぬ所にハ総て此針を以て留もし釣もしくり上もするなり私杯も初の程ハ肌身を刺の恐れあるへしと思ひ用さりしか用て見れハ左様でもなし調法は調法なものなり女ハ此二品なくてハ立行ぬと云ふ

女冠物屋

此店にハ女の冠り笠并に作り花を初め有とあらゆる飾付物を商ふ尤出来合の冠り物をも売る日本の女ハ髪指甲かいに花やら蝶々やら色々の物を付るか当地の女ハ冠り物に右の□たくたを引付る事なり爰にても女衣裳の仕立をする様なり去共大概ハ衣裳地を求出入の〔女〕^(抹消)仕立女を呼寄て衣裳持るか又ハ仕立屋に裁て貰ひ針仕事を業とする女を招て縫する事なり其方ハ安上りなれハの事

鬘屋

此も重に女の見世なり当国の女共ハ若い者にても仲ごとか足し髪とか云ふものを用るもの多し一体日本の女と較れハ髪も薄き様なり男杯にハ私位な髪毛を持つたるものハアメリカ国中尋てもあるまし尤私共ハ頭髪を剃たるからかも知す何しろ君の毛か濃いとて驚もの多し此店にてハ流行の結風に髪毛を仕つらい夫を用る女ハ只それを頭に乗セ彼  形の髪指にて自分の髪にくより付る様に拵るなり女の髪毛にハ(男も同然)日本杯と変り黒もあり栗色もあり金色もあり茶色もあり種々雑多の色ある事にて鬘屋

さんハ夫相應の髪毛を以て足し髪を作らねは成ぬ次第此商人ハ女冠物屋と同く多分女商人なり

因に云ふ当国にハ女髪結なきか如し如何程上品なる女にては髪丈ハ自分にて結ふなり男ハ又鬘を自分にて剃るハ常なり不器用にて自刷の出来ぬ奴ハ仕方なく髪結床に往当地の妻さん達ハ亭主の鬘を剃る杯とハ夢にも見ざる事なり私も自分にて鬘剃事を覚たり至て調法なる次第

女手代の事

善序なれハ爰に女手代の事を記さん右に数へ立たる見世ノにハ殊に女手代の数多く然もならして見たら男手代より多事ならん此等の店にて殆ど女子の買〔物〕^(抹消)へき物のミを商ふ故自つから女手代の方ハ都合よきからの事なるへし然し此外の店にても帳付杯に女手代を遣ふもの多し畢竟女ハ細ヶ敷事に氣か付仕事ハ男より鹿忽ならぬ上給金か男に比ふると安きか為なるへし

仕立屋
「仕立代を
一ヶ月位貸
して置も常
なり」

小問物屋男
店

当地にて仕立屋と云へは総て男服の仕立屋なり此仕立屋ハ羅紗屋ボタン屋兼帯なれハ衣服を作らんと思ふ時にハ仕立屋に羅紗地を見立氣に入たるものあれハ直に廿尺を取らする都合なり是ハ東京の大呉服屋にて衣服を誂る都合と些と似て居様なり尤も儉約家ハ前に申た呉服屋杯にて羅紗地を安買し小さき仕立屋にて仕立させると云ふ此店ハ強ち小問物屋とも申されね共一番似寄たる日本見世の名を付たり爰ハ前

乾物屋

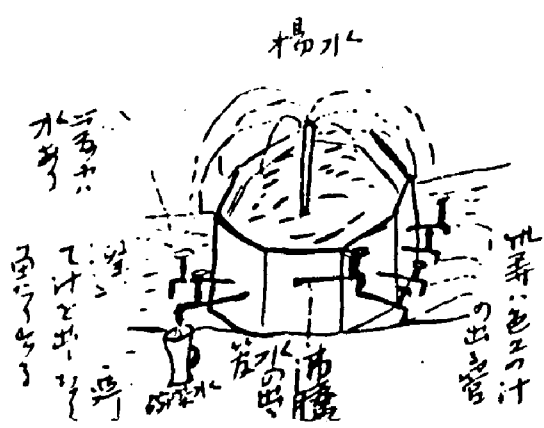
に記せる小間物屋とハ打テ変リ買人ハ多分男なり其商ふ代物は第一シャツ、肌着、襟、襟飾りを初め、〔^{抹消}手拭〕絹ヤ木綿の半手拭、靴下（足袋）、手袋、シヤツ付のボタン、襟飾付の金具（此にハ日本女の髪指に似たるもの多し）、杖、杯を売り儘洗濯物の取次をもなすものあり（洗濯屋の部を見合すへし）

薬屋

代物にハ麦粉、麥粉、大豆（小豆ハ当地にて見たる事なし）、〔^{抹消}□〕黍粉、米、引割麦、茶、コツフキ、牛酪、乾酪、ジャカタラ芋、塩、醬（日本の醬油に山椒の類を交たる様なもの）、牛乳、食料油、豚の脂（日本の鬚付油の如く見える）、石鹼、摺附木、ガラス水呑、糊、小桶、燐燭、汁に入る干菓子、素麵の類、梔子、葡萄、砂糖、箒、塵取、灰吹、香の物、漬肉、漬菓物（漬肉、漬菓物ハ何か構ふ法ありて殆と新き肉ヤ菓物の姿にて永々保つなり味ハ素より新物とハ違ふ^え鐵の瓶に詰てあり）唐□の類、酢、等あり大概の店ハ荷物馬車を所持し注文物を配る事日に三四度より五六度なり大店にて、荷運馬車を三つ四遣ふなり呉服屋其他の大店も右の馬車を所持す此他ハ荷物運送屋より車を賃て配るもの多し

薬種を売ハ勿論其調合もする事なり当地の風医者^の役ハ容体を見調合書を与える迄にて病人の方より其調合書を薬屋に遣り薬を買なり薬屋ハ其書付に随ひ夫々薬種を調合して病人か又ハ其使に渡し自分の帳面

にハ右調合書并医者^の名を記し取医者より送たる書付をは帳面と同じ番号を印して薬取に戻す事なり是ハ薬ヤ盛り加減の間違ひ病人より訴訟するか懸合ありし時戻したる書付と帳面の留と番号分量薬種共符合すれハ先薬屋の誤ならぬ一証となり又医者も猥りな調合書を与ぬ様なるから掟上にて是非右の如く帳付をせねはならず此外空瓶香水、匂入石鹼、櫛、楊枝、歯磨、スポンジ、羅紗払、手鏡、白粉、^{オシロイ}鬚剃石鹼（鬚を剃時用るものなり）、はけ類（白粉はけの類）、小楊枝、巻煙草、紙巻煙草、封蠟をも商ふ夏



は又大なる六角八角の石櫃に沸騰水を作り置レモンの汁ヤ梅の汁杯を混して吞する事東京の白玉屋とか氷屋とも云ふ様なり上の図は私の引たるものなれ

ハ可笑敷ハ勿論なれ共講釈を付たれハ少しは解すまいかと存ず人に分れハ幸の事薬屋ハ一町に一軒ハ大概ありて常に角見世なり乾物屋も右同然角店故乗合馬車を待人々ハ此処に入て待居るハ常に薬屋之腰掛の一つ二は置て其人達の座るに任す

肉屋

鳥獸の肉は勿論青物屋兼帯にて色々の野菜をも売牛ヤ小羊の骨を切るにハ中々庖丁のみにて間に合す斧と鋸をも所持す此斧ハ支那にて云ふ牛刀にてもあるへし西洋にては鶏を割に牛刀を用す肉屋さんハ総て後ろ合の白木綿羽織を着衣服か汚れるからの事乾物屋着屋杯も同然又ハ胸より裾まである前掛を□□多し

魚屋

旅宿屋

此ハ日本と変りたる事なり但し日本人の如く多く魚を食ぬ故肉屋にて兼帯するもの多し□□る魚ハ鱈、鮭、鱈、二十日魚、貝類ハ蠣、なり旅人宿頓と日本の宿屋に似す只客を休る丈ハ同し大抵は料理屋兼帯にて上等の料理を食にハ宿屋に往か又ハ夫所より取寄るなり成程百人も二百人も始終休り居宿屋にてハ嘉料理を仕出せる訳ならん宿屋により部屋代食料代を合て一日幾位と云ふもあり(爰にてハ一に食ても十杯食ても直段ハ同し之を名付てアメリカ風と云ふ)又部屋代のミ一日幾位と極め置き食事ハ客の意に任すもあり(爰にてハ食量の多少にて直段の高下あり之を名付てヨウロツパ風と云ふ)宿屋にハ必ず湯屋

「尤も休り客の用る大小便所ハ二階三階仕階毎三つ四別にあり」
「尤此場当府衛生局の指図にて所々に小便所を設たり」

支度茶屋

と髪結床あり日本にてハ湯銭ハ宿賃の内に入る事なれ共当地にてハ別に湯銭を払はねは成す旅人ならず共外より入湯に往者あり髪鉢代ハ勿論別に払ふ大小便所ハ休り客のミならず世間一般誰にても用る事を許し紙□も備る所あり是ハ当地の街に大便ハ勿論小便便所の設□□一つもなし夫故諸人止を得ぬ時ハ宿に懸込む風なりしより宿屋にても斯して諸人の便に供するならん此他蒸気車乗出場にも大小便所あり諸人に用しむ上ケ酒屋杯にも設置所あり又宿屋内に玉突場のある所多し

酒屋并揚酒屋

本の飯仕度をする所にて東京ならば松田とか上野の雁鍋の類なり大概籠末なる見世にて酒ハ吞せず前に申た通り商人ハ総て上町より出来り東南ポストン其他ポストン府の近辺より出抄する故昼飯を食に帰宅されぬ者多し此者等ハ尽く此所にて支度す女ハ手代手間取の外来らす尤女手代ヤ手間取ハ便当を持参し支度屋に来ぬ者も多し但し女人支度茶屋と云ふ見世も儘あり」
酒屋に日本の如く酒を売のミの見世あり又側ら酒を吞する所あり去厩酒を売る見世と吞する見世とハ大概別なり此酒を吞する見世(揚酒屋とも云ふへきか)にてハ只酒のみを吞セ酒の肴にてハ乾酪、鶏位なり(尤此外の肴を仕出す所もあり)大な見世にハ腰掛高机ありて座り込□□なれ共多分ハなき故立

吞するなり人力車引か榎酒を呑む風情あり当地にて
□□呑酒ハ麦酒なり」

干菓子屋

菓子と云は総て干菓子なり尤もカステラの類ハ売な
れ共日本の餅菓子の如きものなし又餅と云ふものハ
一切なし大なる菓子屋にハ奥の間にて茶、コッフキ
し、氷り乳（牛の乳氷らしたるもの沙礮入にて甘し
暑中ハ別て結構）を飲食させ又飯仕度をもさせる見
世あり上町ヤ府外より買物に出たる女杯ハ旅人宿か
此所にて一寸昼支度をなし前に記したる支度茶屋に
参らぬ事なり菓子屋の手代ハ総て女なり

刃物屋

料理庖丁、膳庖丁（是ハ食事の節銘々持庖丁）、菓
物庖丁（菓物の皮を取たり切たりする庖丁にて肉切
庖丁とハ別なり）、熊手、叉子、小刀、剃刀、夫に
付た諸道具（剃刀を礮革（トウ）「砥石ハ髮結職のものなら
てハ用す」鬚剃に用る石礮并はけの類なり）鉄類色
々総て上等の刃物ハエギリス国より舶来す

煙草屋

巻煙草、紙巻煙草、刻み煙草（煙管□□替て吞分）、
紙巻煙草（抹酒）（を作る）に用る紙、煙管色々煙草入品々巻
煙草一本五錢より十錢手紙其他の用紙大小色々、書
状袋、太福帳、日記帳（此ハ一年中の月日を摺出し
日記を付る人ハ毎日／＼日附を書手間を省きたる調

文房具屋

法なる帳面大概一日半枚当位にて小形なり三徳に入
て持歩行へし）、。墨（インキとて墨汁なり当国にて
。其他帳面
色々、
ハ其時々墨を摺ぬなり）色合品々、名札紙（姓名を

。ペン軸

板刻する事もする）、ペン（筆）、。画筆、画の具色
々、カルタ、字消しゴム、石盤、石筆、鉛筆、尺、
書状量り（重さを量るもの）、曆、祝ひ札（是ハ先
達指上たる如き年始ヤ誕生日杯に遣取する札を云
ふ）、書状挟、紙挟、紙閉紙（ヒキヤ）、糊、写真挟、紙入、
等を商ふ

紙屋

紙屋と唱ふものハ紙諸色の卸売をする所なり糸繩を
も売る（重に包紙ヤ其他雑用に遣ふ紙類を鬻ぎ文房
具屋の売る紙類ハなき様なり）

笠傘屋

冠り笠色々雨傘日傘品々ゴム引の雨合羽をも売所あ
り

飾り屋

金銀玉石の飾り物品々譬は指輪、耳輪、頸飾り、胸
飾り、（抹酒）手頸飾り、（当国の女ハ頸の辺りヤ胸前ヤ
手頸へ色々飾りを廻したり下たりする耳輪ハ掛ぬ
女も適稀にあれ共大抵ハ下る指輪ハ男女共掛る）等
の如し大概ハ時計屋兼帯なり此他床の間飾リヤ叉子
ヤ叉子立（日本の箸立の如し）等の金銀細工をも商
ふ

目鏡屋

年寄の眼鏡、近眼の眼鏡（当国にハ近眼甚た多し）、
写真目鏡、遠目鏡、芝居目鏡（望遠鏡の類にて両眼
にて覗く長さ六寸以下四寸位まで色々あり中央に栓
ありて伸縮め銘々の眼力に合すへし多く芝居に持行
て舞台の模様役者の面并見物人と覗き見る故に芝居
目鏡と云ふ）、塵除眼鏡、日除眼鏡（色付て日光の

花屋

「是こそ本
統に花を遣
ると云へ
し」

力を弱する)、等なり(耳迄掛る眼鏡と鼻にのミ掛
るものと当地にてハ名か違ふ)

花屋ハ鉢植花をも売共切花を売は本商売なり当地に
てハ女ハ勿論男とても薔薇の花一つか草花を小さく
束ね、衣裳の左肩下に針留て置事流行る男ハ上着の
左襟にある一番上のボタン穴に挟み針にて留る依て
ボタン穴付の花房と唱ふ又役者、歌手、講談家、弾
手、等の鼻負にハ大な花手束やら花籠(籠入の花)
やら又ハ花にて十字形ヤ色々の形を作たるものを呉
る、風なり又ハ学校を通し免状を与る時杯ハ両親兄
弟ヤ朋友カ右の花束を免状を請取人に与るなり又墓
場にも花を供ふ棺にも花を飾付等の風ある故花屋ハ
植木を売より切花を商ふ方利があり花と云は薔薇の
外ハ総て草花の事なり鉢を賞美する事を知す夫故鉢
ハ赤き瓦焼の見悪しきものゝみなり当地にハ匂よき
草花多し日本石竹ハ殊の外珍重す花の名ハ至不案内
なれハ種類ハ申上兼る

菓物屋

此ハ格別日本と変たる事なけれ共(抹消)舟車の便カ
宜故当國中ハ勿論ヨウロッパ南アメリカ杯の遠国よ
り檳榔橙等を運来る斯の如く東西南北より入来る故
菓物ハ年中絶す檳榔なら檳榔南の早出来尽る時ハ北
の晩熟が続く故長い間あるなり

ゴム屋

ゴムの製造方行届ゴム引の合羽ヤ靴ハ勿論龍騰水付
の筒やら其他日用の家(財)具類にゴム作りのもの沢

絵屋

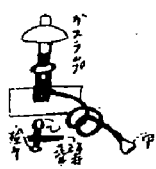
山あり先年博覧会にて家やら毛氈やら器具類繪てゴ
ムにて真似たるを見し此にても染方始め製法の届た
るを知へし

日本支那見
世

油絵、水色絵(日本の如く水にて画の具を溶して画
たるもの)、銅板摺の絵、好敷もの沢山あり水色絵
ハ近來の流行にて余りよき絵もあらね共仲々錦画類
のものならず当地にて錦画を賞美するハ只色の奇麗
なるか為なり当地の画家ハ濃き色ハ出かすなれ共日
本の如く淡く奇麗なる色を出す兼るなり油絵ハ勿論
銅板摺の絵にても少し氣に合分ハ十五弗以上なり
爰ニハ漆細工、焼物、提灯、扇、团扇、掛物、屏風、
花瓶、日傘、両天、麦藁細工、人形、鈿、髪もし、
際細工、等ごた交せて商ふ

毛氈屋

ランプ屋



部屋内に敷毛氈より其他食台に掛るもの等種々雑多
石炭油を灯すもの瓦斯を引て灯すもの(長き紐織の

GEO. A. SAWYER & CO.
MEN'S FURNISHING GOODS,
Fine Shirts and Collars,
Corner of Tremont and Winter Streets.
TROY LAUNDRY,
A List should accompany every package with the
name and number of pieces plainly marked.
Boston, 1879.

No. Pieces	Name of Articles	Amount
	Gent's Collars	each 2
	Gent's Cuffs	each 2
	Ladies' Collars, plain	each 2
	Ladies' Collars, fluted	each 2
	Ladies' Cuffs, plain	each 2
	Cuffs, fluted or with sleeves	each 2

管附てあり其端(マ)に金具(甲)あり其金具を壁に付てある
ガスを引て管乙に被セはめてラムプ迄ガスを引事あ
り)即ち上の図の如し形の不釣合ハ勘弁ありたし
重小襟、袖口、シャツ、等糊張するものを洗ふ寝巻、
鼻布巾、肌着、足袋、并シャツをも洗濯女に遣ると
安直にて濯故多分ハ其方に送る此様な女ハ十二品を
洗て七十五銭位取なり支那人の洗濯見世多く口に水
を含み霧を吹処を見て当地の人等ハ驚き如何して遣
るかと思ふ夫故又穢し逆鼻布巾杯をは支那人に洗セ
す襟ヤ袖口を紙包にし上に張付たる如き紙切を添て
遣ると七日目にハ出来上り向より同じく紙包にし彼
紙切を張付て返す(尤別段急ぎの時ハ七日前にも出
来揚る)

楽器屋
胡弓、太鼓、笛、琵琶にも付す三味線にも付ぬ道具
類、

オルガン屋
オルガンとハ楽器の名なり足にて風を入れ手にて弾
事日本の機織ウチの偶合に似たり、

ピアノ屋
是も楽器にてオルガンに似寄たるものなれ共刃金の
糸を鳴すにて風ハ用なし

桑折屋
此ニ道具の図ハ私の手度に及はず新聞紙の広告の
顔杯に儘絵かあるから序に送り上へし
木造葛籠大小、革作葛籠大小、革手提大小、胴らん
色々、草紐色々、

当国にハ竹なき故葛籠桑折類ハ木か革にて造るな



り爰に葛籠と名付たるものハ先両掛の片桑折の如き
拵方にて重に旅行の節用(抹消)ゆ(も)其作(抹消)ゆ大小ありと離と
も多分ハ木造りにて(革を着セたるもあり革作葛籠
も革のみにて作たるもの)幅二尺八九寸奥行一尺六
七寸高サ一尺七八寸あり仲籠ウチ并に蓋の裏にも仲籠の
如き物入所あり四角ニハ轆轤ありて重き時ハ引事か
出来る革の細引にて上よりメてあれハ少し位(抹消)投
られても大丈夫又一日二日より一七日位の旅行にハ
臺口とか胴らんと云ふ様な横幅一尺六七寸奥行
并高さ九寸より一尺位の革手提を用ゆ是も同じく表
より革細引にてメてあり鉄道にても蒸気船にても客
一人に付彼大葛籠荷一つ位ハ大丈夫許す事にて荷物
掛りに往切符を(抹消)乞(抹消)乞(抹消)は同じ符二枚を持来り一つハ
荷物に結付一つハ荷主に渡し譬は東京を出立するに
盛岡までと云へは葛籠に盛岡と白墨オシロイにて記し荷車ハ
積入る左する時ハ盛岡に着まで荷主ハ(但し商売品
ハ運賃払はねばならず爰に荷主といふハ客の事なり
と察すへし)荷物に何事も心配する事入らず盛岡に
着たる時其所の鉄道荷物方より彼符を照し合せて荷
を請取事にて調法と云ふも余りある次第なり
表具師とか表具屋とも云ふへき見世にハ窓の内より
下る帷(ノレン)とも云ふ風なもの)ヤ壁の上張をする紋
形紙の類を商ふ

家具屋附た

表具師

腰掛色々、腰掛台(支那にて撮と云ふ類なるへし腰

家具鏡売屋

掛の如く後ろに背を掛る所あり、寢床台、(日本の如く畳の上に布団を敷て寝す長さ六尺九寸より七尺横幅四尺五六寸高さ二尺二三寸の台の上に厚さ五寸位の藁布団を布き其上に厚さ四寸位の毛布団「鴨の柔なる毛を用ゆ」か綿布団を重ねて寝る夜着ハ綿入布団にて其下にも毛布団の上にも白木綿を布き又厚き白木綿にて夜着の上を覆ふ是厚木綿の外白木綿ハ一七日に一返位洗濯する事なり夜着布団の大きさは台に叶ふと知るへし)、夜着、布団、机、食台等なり尤も鏡売屋に往と古物ハ勿論儘新き道具をも安値にて買ハるゝ事にて然も何か彼にか年中売物かあるなり

鏡売屋

セリ売屋にハ色々種類ありて書物の鏡売屋もあり家具のセリうりもあり其他何々と様々のものあり尤一軒にて時にハ或品物を売時にハ外の物をセリ売るもあり

金物屋(又ハ荒物屋とも云ふへきか)

当地にてハ堅物屋と唱ふ釘、鉄、類、家作付の金道具(譬は壁に付て瓦斯を引管、水を引管、下水樋、等あり)焼物(譬は洗手鉢「当地にてハ総て瀬戸を用ゆ」、洗手水入、大便所に据る瀬戸桶等なり)、煮焼道具色々

家作付金具


瀬戸物屋

此のミ売る見世もあり
茶碗、皿、小皿、「^{ドランプ}」、ガラス茶碗并菜入、等にて日本と格別違なし

書物屋

此は日本と変りなし

靴屋

靴色々、靴墨、靴墨箒、靴はめ(形 )の如し)、靴紐、等なり

車屋

直車 馬車色々、荷車、小児車等諸色を商ふ小児車(此ハ女小間物屋にても売様なり)ハ人力車の形にて後に引手ありて跡より押偶合なり尤も輪ハ四あり当地にてハ小児を背負はす車に乗て下女か押歩行事なり日本の同店と違はす但し品物にハ自ら差ありつぎ、
双六、の類も此見世にあり



ストウブ屋

ストウブ類一色

古着屋

出来合の男服色々但し皆々古着てハなし

髪結床

髪はさみ二十五銭より三十銭鬚そり十銭より十五銭

質屋

当地にてハ下品なる商売柄とする

板刻師

並に差たる変りなし

写真屋

東京辺の仕立屋か用る器械に同じ

縫物器械屋

石碑石像等を造り売る

石細工屋

諸製造器械を商ふ

器械屋

新聞紙に朝新聞あり夕新聞あり出板の時刻の違なり

新聞紙屋

パン類色々菓子、梨子、桃、覆盆子類、を入麦の粉にて作りたる菓子色々、煮大豆、等なり

パン屋

芝居道具屋

日本の餡なし餡の代り菓物を入るなり当附近辺の風にて日曜(日)の朝にハ大豆を煮たるものを食ふ(採酒)
好ない食物なり

芝居道具屋

芝居ヤ躍衣裳、面、其他の諸道具を売たり貸たりす

蒸気船車間
屋
る長旅ヤ往返の切手を売る往返切手を買と片道宛買
よりハ安上りなり

運送問屋
遠方は勿論府中府外近辺へ荷廻をする譬は浅草に居

者か芝へ送物し度時ハ運送屋に頼て送る郵便にて送

り雜ものハ総て此見世に頼て送る甚た調法なる次第

彼荷桑折杯を鉄道出庫所ヤ其他に送る時も此運送ヤ

を頼む尤出張所ハ沢山ある故態々本店に行に及す家

移の節杯も同然但し家具を配る運送屋も別にあり東

京の車力杯の風なり

奉公人口入
所

日本も変りなし

馬車屋

馬車ヤ乗馬を貸す雨天ならず共芝居ヤ客杯に往時金

持か多く馬車を借ふ当地の野送ハ総て馬車にてする

事にて入費ハ死人の家内(抹消)にてより仕払ふ夫故葬式

家塗師

塀垣ハ勿論家にて石ならぬ所ハ総て塗る風なり金

ヤ木の保ちかよきからの事夫故家塗師沢山あり

靴直し屋并
靴磨き

別段書事なし但し皆小見世なり

革簀張ハセす横丁の角杯にあり皆菓物屋なり冬ハ栗

講釈場并に
音楽堂

を煎て売者多し

扱是よりハ店と云はれぬ共下町にあるものを記さん

日本に譬たら寄席なれ共夫とハ天地の違ひあり小さ

く共三四百人大なる分ハ千人余も容へき場所にて二

階ヤ下共皆腰掛を打並へ置時々ハ日本の談し家類の

出場する事もあれ共多分ハ名高き学者とか能弁者か

芝居

来りて色々の講釈をする(当時流行の演舌なり)又
高名の謡者ヤ弾者か出て歌をうたい又ハ楽器を調ら
へ諸客に一夜の興を与ふる事なり

総て夜芝居なり去氏ガスを満堂に灯して興行するな

れハ中々日本の蠟燭(抹消)明りの類ひならず昼も変ら

ぬ事なり尤府外近辺に住者ヤ子供等の夜遅く迫見兼

る者の為に水曜日と土曜日と一七日に二返ハ昼後に

も狂言を催ふす揚茶屋とか引手茶屋と云ふものなく

見物人ハ直に入口にある切手売場にて切手(札)を

買て入る木戸札と座札ハ別にて座札にも処に依て値

の高下ある事なるか極善座の値ハ木戸錢共に一弗半

木戸錢ハ五拾錢より七拾五錢なり(尤も別て高名の

役者か出る時ハ木戸錢も一弗座錢を含て三弗位にて

一七日も前に買ねは座札ハ売断る事あり)扱入口に

ハ勤る役者の写真あり夫より木戸に到り座札を出セ

は(抹消)札(紙札なり)を割き座の番号の書ある所

丈を戻す夫を案内者に見せると案内者ハ先立して座

に連行なり日本の土間と云ふ所ハ土間ならて板張な

り夫所にハ腰掛を六宛横に統て据置腰掛ハ何れも蕎

蕎絨にて包み至て座りよし爰ハ一番直の高き所なり

(但し日本にて淨留理語ヤ太鼓杯の居所に二階三階

の棧敷ありて金持者の来る所一夜五弗十弗以上な

り)土間の両側に高土間とか鶉とか云ふ様なる所あ

り少し直段安し日本にて棧敷と云ふ所ハ舞台形に土



間(抹消)の上を繞る二階にて同しく直段安し(腰掛の並方ハ土間ニ同し但し土間の腰掛ハ尻を掛る所(抹消)を跳上る様に拵あり芝居の始る前ヤ済たる(抹消)時にハ夫をはね上れハ場か広くなり通行の便よし)二階の上に三階あり四階ある所あり四階目ハ所謂日本の□□棧敷なり三階以上ハ座錢を取らず幕ハ横に引開す上に巻揚るなり日本の如く幾つもある事なく(抹消)〔幕〕大切に下す幕と夫適用る幕と二色あるのミ始まりハ七時半八時なれハ晩飯後に出掛る趣向夫故場内にて飯ハ勿論菓子迎も食す煙草も吞す(物を食にハ見悪しき風習としてあり)幕間か僅か五分長て十分位又中入□□故五幕六幕興行しても十時半十一時にハ切上るなり日本舞台の景色ハ至て龜末にて障子杯ハ何時でも破れてあり諺に芝居の家の様たと云ふ位な(抹消)れ共)り当地の舞台飾りハ至極行届奇麗なり油絵にて景色を作る故樹杯ハ本に樹の様に見え遠方ハ遠く見え家内迎も本統の家其儘に見ゆガスのミならず色々(抹消)の明りを用る故月の夜杯ハ殊によし日本の赤き丸板が出る比ひならず新富座杯にてハ随分奇妙なる仕掛をすれ共当地程ハなし一度火事の景を見たるに火か舞台の下(椽の下)より焚出し烟ハ窓ヤ戸の隙より舞込む様本に身の毛のよ立計なり(此火ハ「カルシャム」と云ふ薬を焚て出すものなり明りのミにて物を焼かす)役者の手業ハ日本も当

「替は眼玉を寄たり引繰返す事悲しい最中に手躍りをする事等余りに通例人間のする事に違ひ自然ならぬ廉多し」

地に劣らぬかと思ふ去なから第一男か女になる故顔か幾位よくても声か可笑敷女とハ思ひ難し当地にてハ女の役ハ女役者か勤め男ハ男役者の受持なれハ至極よし又似声ヤ言葉ヤ身振ハ今日人の話ヤ身振をする通りならて可笑しな抑揚ヤ手業をするなれ共当地にてハ日本にて云は太閤記一の谷或ハ忠臣蔵杯昔の事を興行する時にハ昔言葉を用る事もあれ共多分ハ通例今日の談話と変らぬ身振も同然尤も舞台上にて遣る事故人を感じさせる為當り前の談よりハ高く強く云ふなり当地の芝居に廻り花道と舞台ハ欠てなし遠らす日本を真似るかも知ず人を斬たり傷たりした時血の出る様を見せず斯な様をは当地の人ハ余り勵しい迎好まず裸の景ハ遣らす咻し方ハ日本に勝る日本のだしハ大鼓、拍子木、三味線、浄留理なり当地の道具ハ胡弓大小喇叭大小、太鼓、石磬の類、笛、杯其数十の余あり又浄留理語りと云ふものなし夫故歌に合して躍る事なし一体歌の意を手真似足業にて写す事なし歌を謡ふ者ハ役者自分にて減多に歌を謡ふ様な事なし始終談しに身振なり尤も歌を謡ふ事か主意なる狂言しあり之を興行する役者ハ皆歌の上手なり幕間にハ咻し方色々曲を弾て聞する風にて頗る面白し

乗合馬車諸会社にてハ毎夜芝居車と云ふものを立る是は芝居帰りの人を乗せる為別段に差立る故芝居車

と云なり毎夜はねの頃にハ此馬車か幾つとなく劇場
の前ヤ近所に待居故遠方迄帰る人ハ勿論近所の人迎
も女連のある者共ハ旨乗込なり雨天の節ハ殊に調法
又芝居の近くに馬車屋（馬車屋の顔を見合すへし）
二人乗四人乗の馬違に御者を付て注文次第迎ひに遣
るなり又金満家ハ自分の馬車か迎に来るもあるから
芝居のはねた頃ハ其辺馬車一杯なり雨天の節杯ハ彼
乗合馬車等は一車に付三四十人も乗帰るなり

此頃ハ字を忘て仕方なし幾らも詐字あるへけれハ加
減して読れん事を願ふ